

異分野の心理職における研修活動に関する報告

中條 裕子¹・海津 恵理²・米山 晴雄³・高坂 茉里⁴・海津 庄平⁵

¹ 信州大学大学院 総合医理工学研究科

² 児童発達支援 てらびあぼけっと

³ 新潟県スクールカウンセラー

⁴ 三条市立月岡小学校

⁵ 医療法人青松会 松浜病院

要 旨

筆者らは心理職の資格を持ちつつ、別々の分野・地域で活動している。心理職として初任の頃は各々が身を置く分野の知識や技術の向上に精一杯であったが、経験を積むにつれ、自分の専門以外の臨床現場を知ることにより質の向上が図れるのではないかと考えるようになった。研究会発足当初は、より多角的に知識を得ることを中心として、2018年に活動を開始した。その後、定期的に自主的な研修活動を行っている。今回、発足から5年を機に今までの活動を振り返り、今後の心理職の研修の在り方及び同職種間の連携や協働について整理することとした。

キーワード: 心理職, 異分野, 連携, 協働, 研修

1. はじめに

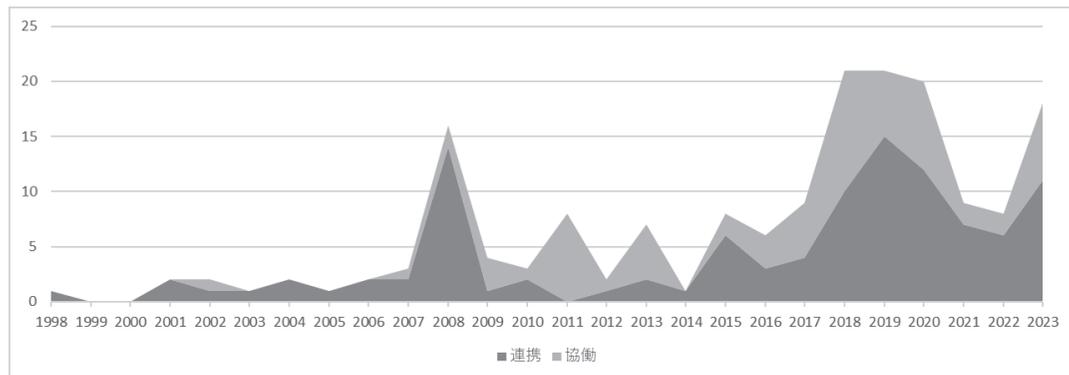
筆者らは臨床心理士及び公認心理師の資格を取得し、日々の臨床業務を行っているが、筆者らのように両資格を併記して活動している心理職も多い。奥村(2019)は、臨床心理士と公認心理師両資格保持者の役割と課題について「臨床心理士の経験では、資格をもっただけでは実践における実力を持つには足りず、必要な研修を多くの者が求める。」ものの、自己判断、自助努力に任されている現状にあるということ述べている。また、二者関係の展開を重視する心理療法を大学院で学ぶが、「組織で働くにはもっと複雑な関係性における身のこなしが必要である。」とも述べている。公認心理師については、現認者講習会に寄せられた受講者の様々な声から「臨床心理士の養成に不十分であった部分を補う内容であったと解するとその意図が見えて

くる」とし、その一部として“連携”の重要性を紹介している。

公認心理師法第四十二条によると、「公認心理師は、その業務を行うに当たっては、その担当する者に対し、保健医療、福祉、教育等が密接な連携の下で総合的かつ適切に提供されるよう、これらを提供する者その他の関係者等との連携を保たなければならない。」とされている(厚生労働省, 2015)。

CiNii (<https://cir.nii.ac.jp/>)にて“心理職”と“連携”というテーマで論文検索したところ、1998年頃から見られはじめ、2023年9月時点では107件という結果であった。同様に、“心理職”と“協働”をテーマに論文検索したところでは、2002年頃より論文が散見されはじめ、68件がヒットした。年代別の論文数については、右肩上がりが増えており、それは、心理職への連

Figure 1 CiNiiにおける心理職と“連携”及び“協働”の検索数の推移



携・協働のニーズとも言える (Figure 1)。

鳥居他 (2019) が紹介した市町村教育委員会事務局での取り組みでは、小児科、自治体教育委員会、保育園、小中一貫校、特別支援学校などのメンバーが一同に会し、「切れ目のない支援の提供」が行われている。一方で、ケースを一生涯、地域でのみ抱えることは困難であることも言及されており、ケースの実態によって、個々の専門性、専門分野に関わらず、体制整備やシステムの拡充も求められてきた。

このように、心理職は「こころ」の専門家として、名称やその活動の認知度は広がり、関係した専門業種と一緒に働くことも増えている。しかし、心理職同士を考慮すると、同職種での連携や協働といった面に焦点を当てた研究はほぼ見られない。その背景としては、同職種での研修会を行う場合、自分の興味のあるテーマに参加することはあっても、臨床上必要ない異分野の研修に積極的に参加することはまずないだろうということが考えられる。

しかし、子ども分野の心理職である場合でも、いつか、今抱えている相談者は大人になる。その時にどんな支援があるのかを知っておくことは、相談者やその保護者にも有益な情報となるだろう。成人期以降の分野の場合は、子ども分野や教育分野の情報を知ること、現在の相談者がどんな育ちをしてきたのかを知り、更に理

解を深める一助となる場合もある。つまり、同じ心理職でも一同に会すことのない領域同士の研修を行うことで、自らの見識を深めるだけでなく、今関わっている相談者に還元することが可能になるのではないかと考え、本研修会は発足した。また、本研修会発足に当たり、会の名称を募ったところ、多様性のある者やその所属を繋いだり、分野を超えた心理職同士が集ったりという意味合いを込めて、「パラレルリンク」という名称を使用することとした。

心理職の研修の場としては、各種セミナーや学会、スーパーヴィジョンなどがあるが、臨床経験の差による上下関係などの要因を考慮して、この研修会は、臨床経験 10 年以上 20 年未満の世代を中心としたピアグループの機能も持つ位置付けとしている。ピアについては、教育、福祉、医療、その他様々なところで定義されているが、相川 (2017) は、「同様の経験をしている対等な仲間同士の支えあいの営みのすべて」としている。加えて、相川 (2022a) はピアサポートの種類(層)を「インフォーマルなピアサポート」、「フォーマルなピアサポート」、「仕事としてのピアサポート」の 3 種類に分類されるとした。本研修会は、個々が現在の所属に至る前に出来上がった会であり、「身近で自然発生的なピアサポート」である「インフォーマルなピアサポート」と捉えることが出来るが、会の特性上

オープンスペースで話すことは困難であることから、やや「フォーマルなピアサポート」に近いとも言える。

また、相川（2022b）は、ピアサポートの成り立ちについて論じる中で、「狭義のピアサポート（フォーマル・意図的・自発的）」の中には、当事者会や家族会などの自助グループ、ピアサポートグループなどが含まれるとし、「同様の悩みや生きづらさを感じ、経験している仲間同士が意図的に集まり、経験を語りあい、聴きあうグループにおける支えあいの営みである」とも述べている。こういったことから、心理職という当事者性といった意味では、本研修会はフォーマルさも兼ねている会とも言える。

一方、2018年に研修会発足開始当初は対面による事例検討を中心としていたが、2020年以降の研修に関しては、COVID-19の予防の観点から、オンラインによる手法に切り替えている。守秘とセキュリティーの観点から、オンライン開催の場合には、特定の個人に関する事例を改め、現在の臨床活動の紹介などを行うこととした。例えば、治療プログラムの紹介やSSTの紹介などである。各担当者により講義形式で説明するだけでなく、実際に参加者にもオンラインで体験してもらう取り組みにもなっている。

オンライン研修に関しては、心理職を対象とした研究はほぼなく、国内での研究知見は得られていない。臨床方法としては、COVID-19の世界的流行に伴いオンラインビデオ会議システムを用いた心理療法（video conferencing psychotherapy: VCP）への移行が急速に進んでいる。日本におけるVCPの初期ドロップアウト要因を探索的に調査した研究では（桂川他，2022），“事前に継続を予定していたcl.はセッション後に継続有無を検討するcl.よりも実際にドロップアウトが低い傾向”が見られ，“「効果予感」の得点の高さと継続に関連が示された”といった結果が得られている。また、三木（2023）は、コロナ禍によりピアサポートを対面で行うことが難しくなったことから、メタバース空間

でのピアサポート体験などの提案を行っている。

本研修会は緊急的かつ試験的にオンライン開催を取り入れつつ、年度ごとに振り返りを行っているが、本稿に際して今回は5過年度を振り返り、対面開催とオンライン開催の両面をまとめることとした。

2. 会則（抜粋）

（名称）

第一条 本会の名称は、「パラレルリンク」と称する。

（目的）

第三条 本会は、新潟県及び甲信地方に在住または勤務する心理関係者の相互の連携を図り、心理臨床上の資質・技術の維持向上に努めることを目的とする。

第四条 本会は、前条の目的を達成するために、以下のことを行う。

- 1) 相互研究のための事例発表・検討
- 2) 資質・技術の維持向上のための心理関連情報の共有
- 3) その他、前条の目的を果たすために必要と認める活動

（会員の構成）

第五条 本会員は、本会の目的に賛同する①臨床心理士、もしくは心理技術に精通する②新潟県及び甲信地方にて臨床現場のある、③「地域連携」に関する知識・技術を高めようとする者にて構成する。

第六条 入会を希望する者は、事務局に申し出を行う際に、①氏名、②所属、③臨床心理士の有無（登録番号）について申請し、承諾を得る。なお、本会入会時点で、本会会員の紹介がある者が望ましい。

（例会の時期、内容）

第七条 本会は原則として毎月1回対面にて3.5時間とする。ただし、冬季は開催しない。毎年4月～11月を開催月とし、7回を基準として行う。

第八条 本会の開催にあたって感染症対策が

必要とされる場合には、対面開催をオンライン開催（Zoom）に置き換えて行う。その際には、「オンライン URL アドレスの転送」、「録画、録音」を禁止し、「イヤホン・ヘッドホンなどの着用」に賛同することとする。

第九条 本会の例会の内容及び会場設営は、参加者の持ち回りとする。

（運営規則）

第十一条 会計年度は毎年4月から翌年3月までとする。年度途中の入会に関しては、その年度の会費の納入を持って入会とする。

3. 参加者の臨床について

参加者は筆者らを含めて、最大9名ほどの構成となっている。それぞれの職域としては、「保健医療分野」、「福祉分野」、「教育分野」、「産業・労働分野」などに携わっており、主に乳幼児から成人期までが相談対象となる。「司法・犯罪分野」や高齢者に携わる参加者はいないものの、それ以外の分野にはそれぞれが何かしらの形で携わっているとも言える。また参加者に関しては、2018年発足後、途中でドロップアウトしたメンバーはおらず、開催方法をオンラインに変更して以降も会の維持は継続している。

以下に各分野のオンライン研修内容を抜粋して紹介する。なお、ここで紹介する研修内容は、在職中に知り得た組織や個人に関する情報は含まない。

4. 研修内容の紹介（一部、抜粋）

【保健医療分野（精神科病院）】

精神科病院にて働いている心理職より「精神科病院におけるアルコール依存症の治療の流れ」に関する紹介が行われた（Figure 2）。スライドの作成に当たっては、厚生労働省の e-ヘルスネット（2023）が、参照されている。

【福祉分野（障害児通所支援）】

障害児通所施設で働く心理士が、実際にオンライン療育でも行っている SST 教材を用いた体

験型研修を行った。

ここで紹介するオンライン SST では、画像処理をほどこし、解像度を下げたイラストが用いられる（Figure 3）。視覚情報を曖昧にした中で行われる「もの当てクイズ」である。イラストを提示した後に、一斉に回答を書いて提示してもらった参加方法となっている。回答に対するヒント（例えば、食べ物や動物などのカテゴリーを尋ねる）の質疑応答は可能である。こういったゲームを通じて生活場面など社会場面に役立つスキル獲得を目指している。

Figure 2 アルコール依存症の治療の流れの紹介

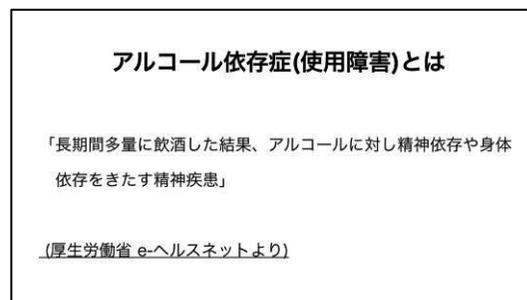
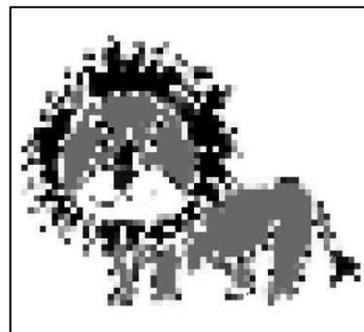


Figure 3 「もの当てクイズ」に使用したライオン



【教育分野（義務教育学校）】

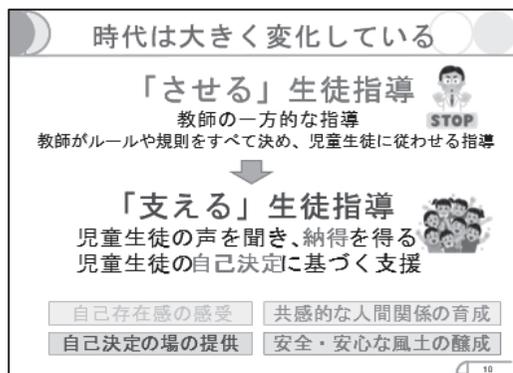
現職教員より、新潟県における現在の生徒指導の在り方について“「させる」から「支える」生徒指導へ”をテーマにした教職員向け研修が紹介され、教職員の研修状況を共有した。

生徒指導については、「小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の

指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめ、生徒指導の実践に際し教職員間や学校間で共通理解を図り、組織的・体系的な取組を進めることができるよう、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」として「生徒指導提要」が作成されているが、様々な時代背景を反映し、令和4年に改訂されている（文部科学省、2022）。

Figure 4 に示すスライドは、中越教育事務所が教職員向け研修に作成したスライドの一部であり、本稿執筆に当たり、中越教育事務所より掲載許可をいただいた。

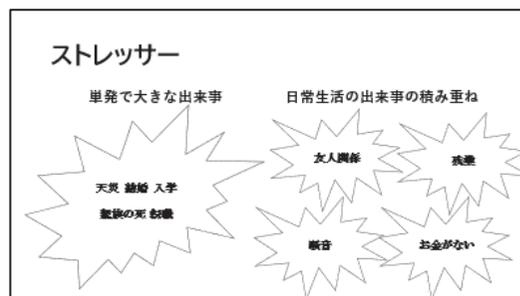
Figure 4 教職員向け研修の紹介



【産業・労働分野（若者への就労支援）】

“若者への就労支援”を行っている心理士が、実際に若者向けの集団プログラムにて行っている心理教育の紹介を行った。Figure 5 は、ストレスについて説明を行った際に使用したスライドの一部である。なお、「若年無業者のストレス対処力と精神健康に関連する要因」を調査した萩他（2015）は、「サポステ利用者の約7割は精神的不健康状態にあり、SOC（ストレス対処力）は一般住民に比べて低い傾向にあった。精神健康には就労意欲と SOC が関連しており、特に SOC との関連が一番強いことが明らかとなった。」とし、「就労支援の中で SOC を高めていくような具体的な支援プログラムの開発が重要となる。」と述べている。

Figure 5 若者向け就労支援での心理教育の一例



5. 参加者の声

活動の振り返りに際して、本研修に参加した感想を聞いたところ、以下のような意見が得られた。なお、意見の回収は、2023年9月中旬、参加者全員が参加した対面研修において口頭で行った。個人が特定される可能性のある部分は除いて、記載している。

【会の持ち方】

- ・対面開催の場合であると、一人が仕切らずとも、数名での談話が可能だが、オンラインの場合には、全員が同じことをする必要があるので、足並みを揃えることに難しさを感じた。
- ・オンラインの場合には、移動時間や前後の体調などを考慮しなくて良いことが助かった。また、仕事が終わった時間など物理的な移動無しに参加出来て良かった。
- ・対面でないと扱えない内容もあるため、今後、対面での開催も行ってもらいたい。
- ・開催の頻度や回数は適切と感じるが、自分の担当の場合には、やや労力がかかる。

【研修内容について】

- ・各発表者が実際に行っているプログラムが参考になった。
- ・自分が行っている分野以外の心理的技法に関する知識を開けた。
- ・自身の所属機関以外の仕事や組織を知る機会として役立った。
- ・最新の心理職を取り巻く情報を知る情報交換

の場として役に立った。

・自分の知識の少なさが身に染みた。もっと勉強しないとイケないと感じた。

【臨床で役に立ったこと】

・相談者との関わりにおける技量の向上だけではなく、他業種へのコンサルテーションを行う際に、同業種からのアドバイスが助かった。

・自分の所属する分野以外の事例を聞く機会はなく、逆も同様のため、知識を広げられたと感じる。

・連携先の動きを知っていることで、連携先への依頼がし易くなった。

・一人職場である場合、職場で心理的な見立ての検討が出来ないため、心理職の意見が聞けて良かった。

6. まとめ

研修会の主な参加者に意見を聞いたところ、おおまかに3つの意見に分類された。

一つは「会の持ち方」に関してである。当初は対面開催を基本として、地域の公民館等を借りて実施していたが、移動に1時間程度かかることもあり、3～4時間の研修と移動で1日潰れてしまうこともあった。ただ、対面での開催であったため、今気になる事例を持ってくることが可能であり、すぐさま臨床に役に立っていた。その後、COVID-19の蔓延に伴い、緊急的にZoomを使用したオンライン開催に切り替えた。移動の時間は減ったが、リアルタイムで検討するには守秘の限界もあり、事例が取り扱えなくなったという経過である。しかし、事例ではなく、プログラムやSSTなどを行ったことで、オンラインながら体験することが可能になったというメリットが生まれている。

ただ、オンラインを使用した診察や治療、処方、心理療法などの知見はある一方で、研修会に関する知見はほぼ得られていない。オンラインに変更しても会が維持されたのは、オンラインの手軽さゆえか、もしくはこの会の持つピア

の機能により得られた効果なのかといったところは不明である。また、ピアに関しては、山川・船越(2020)が「精神疾患の治療を受けた経験があり、その経験を活かして有償で働いた経験のある人」をピアサポーターと定義し、その方々を対象に調査研究した報告によると、「支援者の役割を担うことと仲間として存在することの不協和」という困難を挙げている。本研修会は、心理職という専門職同士のピア関係を扱っているため、同列に扱うことは出来ないが、異分野で働いているからこそ、自身が介入することがないからこそ、不協和が生まれにくかった可能性が考えられる。

二つ目の「研修内容」に関しては、事例を説明するには、大前提として所属する施設で何を行っていて、何を行えないかなどの紹介が必要になる。事例が中心となると、どれくらいの規模の組織で、事例に関わるスタッフは何人いる、それぞれがどういう動きをしているかということが後回しになってしまい、具体的な動きが見えにくい場合がある。副次的な効果ではあるが、事例が紹介出来なくなったことで、所属する組織やそのシステム、具体的な動きを紹介することになり、それがかえって、他分野からは新鮮味のある情報になったと考えられる。

また、淵上・村瀬(2016)は、「臨床心理士は、他職種に比しては、個人面接をはじめとした心理手法を担う役割のもと、個別性・継続性の高いアプローチを、比較的長時間や場所が安定して確保できる中で機能できうる職種であるともいえる」としながら、「だがそこで臨床心理士がそのみに没頭してしまうと(中略)ややもすれば他職種からは密室にこもってなにをしているかがみえない職種となってしまう」と述べている。それは同じ職場で働いている他職種だけでなく、違う現場で働く同職種でも同じことが言えるかもしれない。研修の際に、自分の動きをまとめたり、客観的に分かりやすく説明したりする経験が、実際の職場では他職種に行うことで、より円滑に連携がはかれるという可能性も

秘めている。

最後に「臨床で役に立ったこと」についてであるが、他分野の情報を知らないときには、相手は何が出来るのか、逆に何はしてもらえないのかということを知らずに、依頼していいものか、誰にお願いするのが適切なのかといった連携の部分が脆弱であったと推測する。また、自分だけが心理職という現場もあるため、異業種の中に居ると、アイデンティティを保つのが難しくなってくることもある。ただし、一人職場の専門職は心理職に限ったことではなく、医療専門職や福祉専門職でも同様の職場もある。小池他（2023）は、職業的アイデンティティとメンタルヘルスや職場適応に関連があるとする先行研究に触れ、職業的アイデンティティ測定尺度を開発している。

また、多くの職業で資格取得が20～30代の成人初期となるが、その時期はErikson（1959）のライフサイクル論でいうところの“アイデンティティを基盤として、社会参加し、その一員としての自覚や自信を持つようになるという時期”となる。社会的には更なる発展が望まれる時期とも言える一方で、乗り越えないといけない課題も多い。その点では“職業人としての社会的でフォーマルな自分”と“職業人としての立場もありつつインフォーマルで堅苦しくなくいられる自分”が混在する本研修会は、居場所的な意味合いも持つとも考えられる。

7. 今後の展望と課題

今回は研修会の発足から現在までの経過と現状得られた効果について、おおまかに整理したが、人数が小規模であること、臨床経験年数がほぼ変わらないこと、そして、同じ分野で働いていないことから、同業種のピアの働きや居場所の機能といった面によって維持されてきた経過があると考えられる。よって、大規模の人数で、様々な臨床経験年数の方々が集まった場合には、同様の効果が得られるとは限らない。また、臨床現場についても、地域は異なるが、ほぼ

甲信越地方に偏っているといった意味では、地域性によるものも排除出来ない。

また、この研修会では心理職の領域全てを網羅出来ているわけではなく、特に「司法・犯罪分野」に関する領域と高齢者支援の領域の参加者は居ない現状である。それに関しては、部分的に講師を依頼するなどで補足していこうと考えている。

この研修会としては今後も継続する見通しではあるが、今回の結果を踏まえて、より良い臨床活動に繋げられるよう、更なる内容の精査に努めていきたい。

謝 辞

本研修会は、平成21年修了の臨床心理学コース修了生を中心として発足した会となります。在籍した当時の先生方や同期の仲間達には、大変お世話になりました。また本研修会開催にあたって場所の提供をして下さった各公民館やコミュニティプラザの方々、本稿作成に当たって快く情報提供くださった関係者の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 相川 章子（2017）. ピア文化とコミュニティ・インクルージョン 精神科, 31(6), 538-543.
- 相川 章子（2022a）. ピアサポートの不思議な力 精神保健福祉, 53(2), 150-156.
- 相川 章子（2022b）. ピアサポート／ピアスタッフの歴史的展開と発展可能性 精神障害とリハビリテーション, 26(2), 126-133.
- Erikson, EH. (1959). *Identity and the life cycle*, International Universities Press. pp.1-171.
- 沢上 奈緒子・村瀬 嘉代子（2016）. 心理療法における臨床心理士の役割と課題 臨床精神医学, 45(6), 775-780.
- 萩 典子・大西 信行・児屋野 仁美・伊藤 薫・東川 薫（2015）. 若年無業者のストレス対

- 処方と精神健康に関連する要因 日本精神科看護学術集会誌, *58* (3), 179-183.
- 桂川 泰典・松葉 百合香・飯島 有哉・千葉 一輝・原田 陸 (2022). オンラインカウンセリングにおける初期ドロップアウト要因の探索的検討 パーソナリティ研究, *31* (3), 148-158.
- 小池 康弘・實金 栄・名越 恵美 (2023). 医療専門職の職業的アイデンティティ測定尺度の開発 日本医療マネジメント学会雑誌, *24* (2), 73-80.
- 厚生労働省 (2015). 公認心理師法
- 厚生労働省 (2023). e-ヘルスネット アルコール依存症 Retrieved July 21, 2023, from <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/alcohol/ya-016.html>
- 三木 則尚 (2023). 医療における SDGs をピアサポートともに考える ; ④ピアサポートのデジタル化技術 生存科学, *33* (2), 91-94.
- 文部科学省 (2022). 生徒指導提要 (改定版) Retrieved September 17, 2023, from https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf
- 奥村 茉莉子 (2019). 臨床心理士と公認心理師 臨床精神医学, *48* (5), 582-592.
- 鳥居 佑希・中條 裕子・長谷川 京子 (2019). 多職種地域支援における心理職の役割に関する考察 上越教育大学心理教育相談研究, *18*, 35-43.
- 山川 あすか・船越 明子 (2020). 精神保健福祉分野におけるピアサポーターがピアサポート活動を通して経験する困難 精神障害とリハビリテーション, *24*(1), 82-89.

Report on Training Activities in Psychologists in Different Fields

Yuko NAKAJO¹, Eri KAIZU², Haruo YONEYAMA³,
Mari KOSAKA⁴, Shohei KAIZU⁵.

¹. Graduate School of Medicine, Science and Technology, Shinshu University

². Child development support Terapia Pocket

³. School Counselor of Niigata Prefecture

⁴. Tsukioka Elementary School

⁵. Matsuhama Hospital

Abstracts

All authors are accredited psychologists active in their respective fields and regions. When first appointed as psychologists, each endeavored to advance their knowledge and skills in their chosen fields. As they gained experience, they realized that they could improve the quality of their services by learning about clinical settings outside their specialty. Initially, the workshop focused on gaining knowledge from multiple perspectives, and activities began in 2018. Since then, the authors have continued to conduct regular independent training activities. To mark the fifth anniversary of the inaugural workshop, the authors reflect on their activities, outline the ideal future of training for psychologists, and discuss collaboration in the profession.

Keywords: psychologist, interdisciplinary field, collaboration, training